

京都市・乙訓地域公立高等学校入学者選抜に係る 懇談会（第2回）の概要について

1 日 時 平成19年5月11日（金）午後5時00分～6時45分

2 場 所 ルビノ京都堀川 ひえいの間

3 概 要

(1) 出席者紹介

(2) 事務局からの説明

(3) 意見交換

4 意見交換

○どこでもいいという子どももいるが、スポーツで進学先を希望する子どももいる。希望する高校に行きたい子どももいるし、地域の高校に行きたい子どももいる。

○改善の趣旨がうまく子どもに伝わるか。通学圏を広げることで、子どもたちが悩むのではなく、喜んで行きたい学校を選べる環境にしてほしい。

○あまり選択肢が多くなるのはどうか。1圏になり選択肢が多くなると迷う。具体的に何校ぐらいが適切なかわからないが、あまり多くないほうが望ましいと思う。

○西通学圏は交通手段が阪急かJR。通学区域を拡大するといっても阪急・JRで行ける範囲の通学区域と統合してほしい。

○単純に通学区域を分割するのではなく、互いに境界部分で少しずつ重複する地域を設けてはどうか。

○自分の子どもには、4通学圏の境界線を全部取り除いて好きなI類に行かせてやりたい。

○子どもはインターネット等を用い、主体的に行きたい高校を調べている。好きなところに行かせてやりたい。

○通学圏を変えられるということなら、全部取っ払って高校を選べるのがいいのではないかと思う。行きたい学校を希望できる制度がよいのではないか。

○地域に根ざした学校を維持するためには、通学圏を全て一緒にするのではなく、例えば西京区なら、地域のつながりの深い右京区をくっつけるという方法などはどうか。

○京都市・乙訓地域の地図を見て理想的な通学圏を想像すると、具体的には2つがいいのではないか。

○保護者の方からは通学圏を1つにという話が出たが、中学校で進路指導する立場から言えば、実際に自分で選んだ行きたい学校に進学できる子どもは限られている。

○進路指導の観点からは、多くの選択肢からどこでも選んで良いとなると混乱する。

○部活動や生徒会活動で希望校を選べる仕組みは残して欲しい。しかしほとんどの子どもは地域の高校に進学するのがいいのではないか。

○行きたいところに行きたいという保護者・生徒の思いはあるだろうが、中学校の進路指導の立場からは、20数校の情報を正確に伝えて進路を指導するのは困難。広げるにしても通学圏は2つくらいに分けるのがいいのではないか。

○行きたい高校への希望を叶えるなら、部活特活の希望枠を広げて対応するという手段もあるのではないか。

○地域の保護者や地域の健全育成に関わっておられる方と接していると、地域で育ち、地域を愛する思いをもとに、子どもを育てておられるのを感じる。地域で養われた思いは大人になっても保護者になっても継続され、次代の子どもに伝えられる。

○向日市では行きたい小・中学校を選べる。選択肢は限られているがどこに行ってもいい制度。実際には多様な選択ができて地元学校を選ぶ子どもが多いが、行きたい学校に行ける制度を保障しておくことが大事。

○シンプルで多様な選択をできる制度がいいという観点からは、通学圏を全部取り払うのがいい。その中で行きたい学校を目指して努力すれば、入学後も充実した学校生活を送れるのではないか。

○将来はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類の区別を無くして、入ってからコースを選ばせる方法も考えられるのでは。

○一度に1圏にできなければ、2圏くらいで総合選抜の良さを残すのが妥当かもしれない。将来的には1圏も検討すべきではないか。高校も特色化に力をいれるし、中学校もわかりやすく、生徒も努力できるのではないか。

○保護者や中学校の不安もわかるが、本校の入学生の意見を聞くと、ほとんどが本校を希望して入学している。例え1圏にしても地域の学校を希望して進学する生徒はいるはず。

○自分で選択をしたい生徒がいる以上、選択幅を広げることが一番大事。

○改革の機会があるのなら、しっかりとした目標に向かって改革に取り組むことが大切。「とりあえず」という発想ではなく、現状での最善を見据えた改革を行うべき。

○シンプルで選択肢が多様となっても、中学生はそう簡単に選択肢を間違ってしまうことはないと思っている。中学校、保護者の適切な進路指導も可能である。

○現在は総合選抜と単独選抜が混じった制度。詳しい説明を聞かないと理解できない。わかりやすくするためには、希望する生徒が希望する高校に行ける制度が望ましい。

○体育系部活動はⅢ類体育系で全域から志願できるが、文化系部活動は通学圏を越えて行きたい学校を選べない。他圏の高校の文化系部活動にあこがれて行きたいと思う生徒もいるのではないか？

○現在でも口丹・山城地域の遠方から市内に通っている生徒はいる。

○段階を踏む必要があるかもわからないが、基本的には行きたいところに行ける制度にするのがいいのではないか。

○子どもがインターネットなどで主体的に行きたい学校を選ぶ時代になって、高校も特色づくりに力を入れなければならない状況になっている。通学区域が広がれば高校もしっかり頑張らなければならなくなる。

○学校評議員からはもっと学校の特色を出すように指摘されている。自校の情報をもっと発信して選ばれる高校にしていきたいと考えている。通学圏が広がれば各校の気持ちも引き締まるのでは。

○本校の吹奏楽部が全国大会で好成績を残した。普通科は南通学圏以外からは入学できないが、吹奏楽部に入部したくて、何とか通学圏を越えて入学できないかという問い合わせも受けている。子どもたちの姿を見ていると生き生きとしており、部活動だけでなく学校生活全体にも好影響を与えている。

○本校の生徒は99%自転車で通っている。生徒にとっては自由度が高く、都合がいいようだ。健康のことを考えれば、高校生には自転車通学のほうがいいのではと思う。適当な交通機関が無い場合も自転車は便利だが、1圏では適当な距離ではなくなる。2圏くらいがちょうどいいのではないかと思う。

○中学校としても、中学生が希望する高校に進学できることが望ましい。しかし、すべての高校が選択肢となると、進路指導上それぞれの高校の情報を正確に生徒に伝えられるかが不安。

○中学生の成長過程を見ていると「希望」と「適性」が異なる場合も多い。それを踏まえて進路指導する必要がある。

○1圏化すると普通科高校の序列化が進むことに心配を覚える。

○地域の間人関係が薄まっていく中で、地域を愛して地域に奉仕する心を育てることが重要になっている。地域が学校を愛し、学校を支援する関係を築くためには地域の生徒が多いことが必要。

○1圏に向かうにしても途中のステップは必要。具体的には2もしくは3、選抜に関わる詳細なデータを確認しないと決めかねるが、それは教育委員会事務局に任せる。

○学校の特色に応じた適性を持つ子どもに来て欲しいという高校の気持ちはわかる。しかしそれならば部活動など希望枠を拡大していけばいいのではないか。

○選べる学校を増やしても、例えば西通学圏から北通学圏の高校を希望することはまずないであろう。

○I類の希望枠の倍率や、専門学科の志願倍率が高いことを見ると、高校が特色づくりを進める中、生徒の行きたい学校への希望が高まっている結果。

○理想として、行きたいところに行けるのは大事。今の制度では生徒が必ずしも行きたかった学校に行けるわけではない。進学してから、友人関係に恵まれたり先生の指導を受けたりして、学校を好きになるかもわからないが、少なくとも初めの段階では行きたい高校に行けているとは限らないことは念頭に置いておく必要がある。

○希望する生徒が全員希望する学校に行けることを目指すためには単独選抜しかない。希望枠を増やしても、他の生徒は行きたいところに行けない。ただし、総合選抜の良さを残し、単独選抜の課

題を十分検討していかなければならない。

○校長が力を入れて自校の理想の姿を宣伝しても、入学してから担任の先生がうまく指導できなければ、校長の話と違うではないかとなる。通学区域の弾力化と合わせて教員の資質向上も図れば、さらに学校が活性化するのではないか。

○私は吹奏楽部だったが、当時の顧問の先生の指導を受けたくて吹奏楽部に入った。英語や数学の先生を何故選べないのかと思ったこともあった。先生に憧れてその学校に行きたいということも大事なことでないか。

○かけがえのない竹馬の友を得られるのはやはり地域の学校。

○通学圏が広がると情報が複雑になりすぎるのではないか。昔、小学区制のころは高校が決まっていたので、公立に行くと言えば進路指導が5分で終わった。情報が多すぎると進路希望を固めていく際に、勉強が疎かになり特色探しだけに時間を費やす恐れがあるのではないか。

○素晴らしい先生との思い出は大人になっても生きている。特色づくりに合わせて先生の指導にも力を入れて欲しい。

○通学圏が広がるのはいいが、山城地域の選抜について京都新聞の記事をみると、通学圏を統合したことの弊害が記載されていた。学校の格差など、単選にした場合に何がメリットで何がデメリットとなるのか。

○通学区域が広がるのはいいが、広すぎても高校を選べなくなる。